

【配点】 ① 各1点×20 ② 1・3・③7・④2 各2点×7 ③6 6点 その他 各4点×15

1

砂鉄

2 仏像

3 義務

4 平易

5 沿岸

6 複雑

7 貴重

8 読破

9 効く

10 勤めて

11 試金石

12 度外視

13 過不足

14 相対的

15 言語道断

16 一日千秋

17 ぼうくん

18 げんせん

19 ちき

20 かつあい

2

1 A ウ

B ウ

C ウ

D ア

2 I 優雅な姿

II 永劫に荒

3 イ

3

1 エ

2 イ

3 この世に生まれていない

(同意可)

4 I 生まれる前は死んでいた

II エ

5 イ

6	言	け	よ
	わ	た	う
	れ	の	や
	、	に	く
	拍	、	自
	子	狂	分
	抜	犬	の
	け	病	死
	し	に	と
	た	は	折
	か	な	り
	ら	ら	合
	。	な	い
		い	を
		と	つ

(同意可)

4

1 ぼくらがが世

2 ウ

3 言葉の多

4 表現を

5 意味を表

6 色

7 エ

① (漢字の書き取り・読み取り)

1から10までの漢字は全て、ベーシックのトレーニングテキストにて出題されているもの、あるいは、既に習っているものである。復習テストに出題されていたものも多い。漢字の学習を通じて、ことばを身につけるということがどういうことなのかをわかっていってほしい。11～16は三字熟語・四字熟語の知識を漢字の書き取りの形で出題した。17～20は読みの問題である。読みの問題もことばの意味を確認しながら確実に覚えていこう。

②

1 基本的な語の識別の問題である。Aは副詞。ここでは状態の副詞である。Bは形容動詞。言い切りの形が「～だ」になる。Cは接続詞。逆接の接続助詞との区別は意味内容からは難しいが、そもそも自立語か付属語かは確認できるようにしたい。Dは連体詞。これについては覚えてしまおうのがよいだろう。

2 副詞表現「あたかも」に絡めた読解問題である。「あたかもそれが吉祥のしるしなのだ信じられて」とあるから、Iには吉祥のしるしに見える様子、IIにはそれと対照的な様子を見せている環境を入れるということになるだろう。

3 慣用表現「胸をうつ」の意味。体の一部を用いた慣用表現は確実に身につけていこう。

③

1 「日は沈みかけ」「闇が足許に忍び寄る」時間帯である。また、墓に向かう様子として、周囲の不気味な雰囲気を感じていることもイメージできるとよい。

2 お祈りをしている場面から続いている。といつても先祖の供養などではなく、直後に「ここにいる沢山の死んだ者たち。私も、いずれ、この仲間入りをするのだ。」とあることから、もうすぐ自分が死んでしまうと考えていることがわかるだろう。

3 「母親のおなかの中で、ただ存在している」だけであったころに似ているとあるので、そこから考える。

4 I 「この事実」が指し示す内容は直前の「私は、生まれる前は死んでいた」であろう。説明文への穴埋めの形であったが、そこを用いればよい形であった。

II 「愕然とした」は「ひどく驚いた」の意である。Iの内容を受けてひどく驚いたのだから、それまで考えていたことと食い違っていたということであろう。「馬鹿馬鹿しい」や「困る」「感じられる」では「愕然とした」という傍線部へのつながりが弱すぎる。

5 「飼犬だと狂犬病にならないの？」に対する答えが「⑤」である。

6 理由を問われているが、「力が抜けて行く」理由であるから、心情を答える必要がある。「拍子抜け」などのことばが浮かべば、あとは何に対してなのか、できごと・事情を補っていく。「決心した」「いさんで」などの表現との結びつきを考えられるとよい。あるいは「意外」「拍子抜け」は「～のに：から」のパターンが使えると考えるのも有力な解き方である。

7 「つじつま」ということばは知っておきたい。そのためにも、普段の学習のなかで積極的に意味調べをしておきたい。「～が合う／合わない」という言い方になりやすいということも含めて身につけよう。

8 「擬人法」ということばは難しかったかもしれないが、設問のなかに説明があった。石を人のようにあつかうことで、自分に近いものとして見ていることを表している。

④

1 問いかけなのでここよりあとをみていくと二つあとの文に「言葉は、ぼくらが世界に名前をつけていって、できたものです」とある。

2 代表的な作品名と作者名はおさえておきたい。ア「蜘蛛の糸」は「芥川龍之介」、イ「坊っちゃん」は「夏目漱石」、エ「高瀬舟」は「森鷗外」である。「太宰治」には「津軽」のほかに「人間失格」、「斜陽」、「黄金風景」などがある。

3 線③の直前にある「言葉を細かく区別すると」に注目していくと、本文うしろから四行目に「細かく区切ってみると、言葉の多さ、広がりを感じることができます」という一文がある。あとは（ ）にあてはまる部分を答えればよい。

4 線④の直後にある「すると」に注目して続きを見ていくと「表現を分ける」ことができる。とある。

5 「つい使ってしまうがちな、大ざっぱな言葉」の具体例として取り上げられている「やばい」という言葉について、マイナスのことが書かれているところを見ると、「意味を表しづらい」と書いている。

6 二字で答えるなら「言葉」が考えられる。十五段落で「クレヨン」の色の数のように、言葉の数も多いほうがいいですね」と「言葉」を「色」にたとえていることを見落とさないようにしよう。

7 アは後半の「なるべく細かく区切った言葉を使うのがよい」が合わない。イは『語彙力』があると言葉をたくさん知ることができると「言葉が合わない」が合わない。「言葉をたくさん知っている」のを「語彙力がある」といった。ウは後半の「本を書いていかなければならない」が合わない。エは七段落に書いていることに合う。

以上